

『エッセンシャルワーカーと呼ばれて』

西脇市病院事業管理者・病院長 岩井正秀

年明けと共にオミクロン株を主力とする第六波の襲来が急激な勢いで始まりました。西脇病院もかなり攻め込まれ、救急外来で新型コロナ陽性と判明した症例や、家族から感染した職員も認めました。しかしながら第六波の感染力や拡大の加速度を考慮に入れ、こういったことは十分に想定内としていたため、迅速な対策が取られ、何とか大事には至らずに、病院は踏ん張っています。

さて、そんな昨今、私達はエッセンシャルワーカーなのだとされています。社会機能維持者と訳され、人々の生活に必要な不可欠な労働者のことです。何をいまさらという気もしますが、世の中がそういう視点をあらためて持つのであれば、私たちも、自分自身を振り返る良い機会としなくてはなりません。病院が患者さんを診療する所である限り、多少の程度の差はあれ、病院職員はみなエッセンシャルワーカーであり、共に新型コロナと最前線で戦っています。その精神の下、生活を律しなくてはならず、対応においては「誠実さ」と「勇気」を持たなくてはなりません。また、防護服や、検査キットなど、戦うための武器も、十分な確保が必要であり、これは病院の責任であると常に考えています。ワクチンをいち早く接種すればそれで良いというものではないのです。

「天の時は地の利に如（し）かず、地の利は人の和に如（し）かず」という孟子の有名な言葉があります。戦いにおいては、良いタイミングや勢いよりも、地理的優位さやハード面が重要ですが、さらにそれよりも、人の和が大切であるという教えです。新型コロナは強い勢力を持って攻め入り、私達の防備の隙間を突き、切り裂こうとします。それに対して私達はより強い「和」を持って戦わねばならないのです。しかし、この「和」は自然に、簡単にできあがるものではありません。皆が意識して、その形成に向けて努力することが必要であり、そのためには、自分の気持ちを過不足なく表明し、相手の言うことに真摯に耳を傾けなくてはなりません。コミュニケーション能力というものは、決して生まれ持ったものではなく、他者との共存への希求によって獲得され、鍛えられ強化されるものなであります。そして、その契機として、日々の声掛けや対話があり、さらに大きなエネルギーを持って、それを持続させ深遠化することが重要となってきます。そのことが達成できた組織の強さは、北京オリンピックのロコ・ソラーレを例に出すまでもなく、注意すれば様々な所で見ることができるでしょう。

以前、他院のベテランの先生と共に院内を案内した時、「すれ違う方が皆さんきちんと挨拶されますね」と感心されたことがありました。その時はあまり気に留めませんでした。コロナ禍の今、気分がすさみがちな社会にとって、そして人々にとって、それは非常に大切なことだと感じています。エッセンシャルワーカーであれば、尚更なのは、言うまでもありません。